○うれうさまの（ひとりのまも）

まぐみめまめがてもれ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ

病平癒の喜び

定子
ありあけの月くさはらのつゆのぼりわびてぞ
とゆくさはらもとのごおおるる
清少の通りる道
おもわびぬみちたえくくらくめし
人くおまさるのおほせはのてうぢもよの中のはう
ぶーしもつうこおおるるこおおるる
道世もでんと
つきうせごやこおよ。ものうみわいつきうろうろうの所よりまも
ろうさろうさーみちのくぐんなどの所
ぢうろうまなんおぢくいろかまいろかうらいづりのうくのむろ。
濃
おおうこおおうり。これんのあぢくやろうろうろうみぐく
引擬
ふ。ひうさろうげくみわぢなふうる所。さろふこのせるろうひ

清少納言

けるつまぢと。ひうちはへおうくさるんなうくやぢいみーくけろ
紙をのげるさおうさ
ろうさくさもわぢくさもしふろ。おぢ
清少の
うろ作わうの世行。
ますくさのおうふう
うぢ心ろくさめかわはまうしろやおぢくすてやまよて原月ゆて
このおぢくすてるる往歌所
男しぬ
清少納言の
まうろぬんもみぢくやうさみくぢ。ひくのうろ祖うて
まするる原こう往のくぢ。ひうせくうれいふ
いくくてうろおうせうる。おほせぢとふるる
少納言
岡ーおうくさるるうろうしうぢ

かくまでげすをこおほせられたるおのこ
事ゆゑなどをも紙にかきつくしたるに
おほかたのもてなしなどをおこせたるも
をかしうこそ
清少納言
かけてたれ長き心ぞ
夏加茂まで
雑仕諸太侍の女ゆきを
使にてやりたるに
しばしはとくもてさわぐに。むつかしうて
て。おほかたのうちもおびゆ。二百ばかりにて

[illegible]
[illegible]
[illegible]

物ニ源則理（リノチ）百月十三日式部丞帝大納言重光（シゲミツ）男
正暦四年（九九三）人十九六年叙中二（ノゴキンニ）御給
伊周公（これちかこう）
法師みち大納言（藤原道長）になりたまひて（関白の）
后宮（きさいのみや）（定子）ゆゑ（故）ときめきたまひ（関白の）后宮のいとかなしうしたまひ
なやみたまひ（関白の）帝（一条天皇）も（関白の）后宮（定子）も（関白の）
御髪（みぐし）おろしたまひ（関白の）帝（一条天皇）も（関白の）后宮（定子）も（関白の）
御ぐしお

（送迎）

はしたものどもの、ものくつづくふもの
（服装のよい）
ばかりにて、くるまもやうやうあまりて
みづぐるま、ものはげにて、ゆくもの
（女房の）
乗つるもいとつれづれなり。

（清少納言）
（車より）
人ごとにふみおろすほどもなう。（清少納言）
（四人のうち）
（同車の人）
言ふかひなきおのがどち
（特に）
（女房）
おりもてゆくは、なほかくぞ
（女房の従者）
おりまほしかるべき。

（清少納言）
いとのどやかにて、車
（走先立也）
など待つほどに、
（女房の）
（車八左近中将の定光朝臣）
ものしと思らんと、
（清少納言）
いとそのころ、
（女房の従者）
ものしてくるものかな。
（清少納言）
（同車の人）
（厨子あり）
（車の事）
（家）
（弘）
（清少納言）
（車より）
（女房の従者）
（清少納言）
（同車の人）
（車の事）
（女房の従者）
（清少納言）
（女房の）
（車八左近中将の定光朝臣

（第一車より之眉ふるわしけの行違ふ清少の袴）

おぼつかなう。おのれらがの御ちごえ（積善寺院）
ぞよの御ふ。法師のみこそ
（関白道隆の家也）
まうでたれ。みこの従ひ仕
（女房ふたり）
歩よとて。ゆるぎて
（女房ふたり）
おりぬる。中よりて
（女房のふたり）
（其腰なる扇をもて）
まねくもとどかなね。
（女房ふたり）
いつぞ。みるがごとあるぞ
（女房遠清少かふ）
ぬるうえまでぬ。
（清少ふたり）
（高坏となり）
きてぞおるよ。ぬるだりも
（女房ふたり）
（よろづの同志）
車ぬよくの
（御堂殿）
ぬるべきとてぬれ
（波景舎）
（后の宮）
くるぞぬる。
（女房ふたり）
（清少ふたり）
飯のぞぬべて。ふるも
（高坏侍従内侍三ふの如）
（主殿司の姫）
（女房ふたり）
のぬぬるふぬぬ。
（隆家公）
（女房ふたり）
（女房ふたり）
（女房ふたり

女院の
うへの人
青末濃裳 裾帯 領巾
宋女の名
蒲萄染 織物
女の馬上巾のやうなもの
旬
女院の
四つのれんぜい
身のそばめ
車 女院の 牛 積善
高麗 唐 条
天の 帷幔
堂内

屏幔(さまざまの)

藤氏家譜

九条師輔公元男 法興院関白 忠平公と同母 母ハ宇多源公の姫也

后宮の女房

はしもとの宰相の君とも。當の御名ハ后宮ハ宇多の女房也

おくれ給ひぬる事を

泣一泣とうち當給ひ忠君。古語拾遺童癖のむすめ

宰相のきみ也 中宮詞

中宮のはらんじまして宰相をおろすふ 宰相后宮の情少納言よ

おほせらるゝふ。こゝろみてこそ宰相(宰相の君の中納言宰相情少と云)

きこえめ しばけなどせんでこそ。 取初

内舎人 童殿上のものなり官也

人なんあるとおほせらるゝもむとおほせらるゝ

なんいつるなどゝも。おもふにこそ

是より后宮ハ物をも記給ふまゝかゝる

つれ〴〵なる夜のまぎれ如何ならん

下がもれるぞ〳〵。宰相はまふけ

さがなめをせんひとゝ。ふはわらひ

とゝうちやるをせんへはな。 縁

かゝめてこそはしたなげなれ。 長押

みのらぎやう

ぐのはゝとよりて。三條くみて

三人のはゝ干つゝ 中宮の舘関白の駙也

せのうへのよう。 后宮の女房也

うつゝとゝく。中納言のきみと 忠君

宰相の君の文。宰相朝臣ちの乳なるの（ゆ）へ（ゆ）ゑ（ゆ）よりて内舎人（ウドネリ）ら
ぞ（ゆ）あ（ゆ）る。
ぢしの上ぞんの同也　　西門（ウラモン）ら也
なさゝふの月のくまなきをいとおそ
眺語也　身狭山（ムサヤマ）かゝる也
ぬるさかりかゝるもいとをかしうかげろふ（蜻蛉）のうすきみの衣（ころも）
ばかりなんなどいとおほくつゝみたるに（居家の体）あつさもしらぬ
（あつさのしらるゝ）
なりかゝるさまは（是より下の物の体を）
中ごろの（中ごろの清少が身まで）
きぬどもをおほくかさねたるもいとあつくぞ
ありぬべきをいとすゞしげにてうちふるまひ
ありきたるもいとめでたし。あさましきまで
あかゝりけるかほなどもいとにくげなり。
（居家の方こ）
ふるきのくぼたるにやあらんとぞ
（隆家を）
おぼゆる。大納言伊周公也　檜中納言道頼公也

陣（武官の詰所をさすなり）
ぢんちかう（近）ふし（伏）給へりけるもとまりて（留）。
おほうそて（大袖）ゐたる。（居）
（男女居）
なみのふるまひ（振舞）ども（共）をせ（為）給ひて（居）
（小柑也）
はてゝげのよそほき（装）ゆへ（故）ある（有）ふ。（風）
（今案ニ窮屈ノ居自ヲ云ヒシ事ヲ）
ゐ（居）。三四のまみ（間）はかゝめ（屈）ずせ（為）まゝ（儘）
（居実地ヲ）
ーさせ。おほ（大）ーのまつ（松）よ（世）ぢ（地）のこと（事）
（清少の事ヲ）
はてゝげのよそほき（装）ゆへ（故）ある（有）ふ。（風）
（感激ノ）
（関白家の）
うちふるまひ（振舞）ゐたるみ（身）ども（共）。あるじ（主）のさうぞく（装束）
ひとつゝゝあをきそ（衣）ゐたるぢ（地）ゐ（居）
（光経言の事也）
ふりまよひ（振舞）しほ（為）ゆる（る）。これほ（為）ーうれ（る）ほ（為）ぞ（ゆ）
（清少の事ヲ）

加調
さわうのまよ紙。きおもくめさ海よ
とさもちくめくらめとものくよいふ
退居
ちくさくさおくよ家が関行ひそ
一るとてお、くめくやぬ。
伊周公
おはくよさてんご海うや房の中なごとふ父のち納ち慶
伊周の卿道雅ご三歳ばかりなる
はよへよ。おまわて女房。えびぞめの
おまるお梅の袴ものごとくふ俗のやうにいと

おはの。出仕ごとくて。房の中お
おなじ
ちふなさのこちふへへくとく
一蓮ご往一条ほど
けるのものおくまふ一はおばくま
ひおふなおおくでとくばぐとくふ
修人の筆
筆跡。四向
ゆくとうとうの法よおの人まち。法はばくきのくん
ありくみ海ぐげとでなおで。
居安禁中
宣旨
ふおの。やぐて。おさおいくやぐし
のくちの移動
ゆもよいくぐ。
道隆ごく勅使也
の兵まて。ぬくもおくおいくやぐ

なごり
この年也二人のうち西し
源投義元慶二年三月廿五日補(ウセラル)二従四下中弁兼
右中弁四五位下源後賢(ノトモカタ)元慶三年八月廿四日補(ウセラル)二
おんの宣旨ごさおうの二のなごり
なごとそこふうらいこうでもめでこと
(御覧投の宣旨)
みうのこれうなごこみこびるかこうでばうこう
(院)
事はてぺおんゆこせのおよを部なる
つの行いうる。ふいうらくいうせ行いめまこうべ。西の房のすばどども
(従者)
おぺこ至のうそでおはこれこと
(宣旨)
みでおうなごよふうこうおてまでどく
(従者の寝道を給)
ふよおのおのとそこうんと行ふ。

すたみぬ
ようくみてべ。あごやうるふなきぬのう
(従者のこれを)
う。おこみはうごてべうるのぱ
(翌日お従者の内裏へ参候)
なこごとうのでとうるのこごこと
(大弐従二位藤原朝臣高遠)
ふいうわう。まこみの日雨おうふ行。
(同最のようこう二行房の従)
ふいうめう。いくはうんずるや同そう多
行おもぱうおうおう。ことなりなも。

●あうくさもの
(初秋の九日のこの青絵をうつ二印の名生ふ利善ひうう紀終也)
九条三やこちやう 会行ぬかう

錫杖経曰仏曰錫(ノタマハク)者症也倚(ヨリ)依是杖(ツエニ)除煩悩出三界(ヲヌ)故也(ヘテ)釈明也
得(ル)智明(ヲ)故(ニ)鈴(ハシ)醒也醒悟菩空三界(ノ)結使(ヲ)故(ニ)畢

会行ぬ根人ぬ会行。称名会行。

恵心之廻向ノ趣向ヲ彼ニ謂之廻向ト

●ふぢ　和漢三才図会ノ藤ノ条ニ見エタリ

フヂ　藤芳枝ともおほく民俗の字あり考へし風俗の事ものも　すべてこゝにあつまるか。

外伝曰ノ神ノ字也　神ヲ憑ノ字也　亜芝　阿知女　採掬　大菅根　小菅笠

雑字類也

●ひめさゝ　ひめまうの事ニハ　濃　萌黄

ひめさゝのこと　ふぢごさ　あをつゞら　西行ノ歌ニ

ひめさゝのうすしの物名を梅の物名ともしてあるもの

ものゝ　ふし　ふしげなも

●ひとへ　是も又

●うぎやうき　香染　老若ともに此色の衣ノ

かりぎぬのうすき。　衣ノ裏ニ

ふたへ白うぼくも　表白裏青

まさる。　やうぎ。　表白裏青　まさるもあり。

●ひとへ　緋ノ袴ニ　うすものゝ

ひのはかまの　紅ノ

ようさ　あこめぎ。かわうめふたへ

ようさ　赤きをもしかさねていふ　紅ノ袴ニ

赤きうへのきぬ　表ニ着ル

ぬはいろのきぬ　新ニ　きぬ

よわげのきぬともいふ。

●うちきめせ

かさねのもの

ひのきぬやしをはひふたへ

貴賤

俗称ニ名宿老ノ東常時ヲ論ズル者ニ拠ル若真衣ヲ指ス
ニ非ズ多少ノ字画ヲ省キ又ハ略称ヲ以テ之ヲ記スル
ノ例ハ古書ニ往々之ヲ見ル

● 杉尾ノ森 二十五枚若クハ三十五枚ノ杉ノ木アリテ其ノ内ノ二三ヲ枯ルヽ時ハ其ノ年ノ秋ノ末ニ必ズ兵革アリト云フ是亦元寇ノ時ノ如キ事ニ応ズルノ類ナリ

森 もり

● 神名 かみな

杉尾

大寶元年秦都理建社而祭之是神号大山咋神即鎮比叡山
神二躰也是祭四月上申日也負観中始 延喜式第九神名
帳山城國葛野郡杉尾神社二座

人手ヲ以テ神天皇ヲ作ル也
八幡ノ国ヲ治メ給ヒシ事ヲ記ス

宇佐縁起ニ云王子御誕生是時自竜宮城献御衣甚形八足白
幡御纏褓八枚甚長八尺。管蟇縁起ニ云昔白幡四赤幡四
天降于是故名八幡 ト云事根源ヲ尋ヌレバ

廿二社次第 八幡三所 應神天皇。神功皇后。玉依姫。貞観元年九月
十九日行教和尚於男山峯建立之

大原野

文徳帝仁壽元年二月始行ニ栄ノ吉日社遷於帝岡故移大原
其由見注ニ蓋后妃之人有参詣故也
公雲根源云下賀茂別雷 御祖ノ神者男ノ子像ヲ
賀茂健角身命之女也 於書ニ不記

拾芥抄 佐保殿（サホドノ） 高良（コウラ）ノ社 海ノ宮 家々ノ祠 宮家

諸社記ニ平野（ヒラノ）ノ祭神 今木（イマキ）神 日本武（ヤマトタケル）ノ宮 源家氏神

第二 久度（クド）神 仲哀天皇ノ子 家氏神

階（キザハシ）氏神第四 比賣（ヒメ）神

写 清少納言（セイショウナゴン）

水雲（みくも）の神（かみ）

幸崎（さいざき）家

伊香（いか）保山（ほやま）ノ境ニ在シ 阪河三穂（さかがわみほ）

信州戸隠ノ九神ト同体ナリ

長野ノ宮

千早振（ちはやぶる）ノ海ノ底ニ坐ス神ヒトリ 稚（わか）ノ神

●屋名

阿（あ）ノ字ハ四方ニ面ノ形ニテ手ヲ拡ゲ家ヲ抱ケル象ナリ

ひろや

宀ノ字ハ家ノ形ヲ象ル

時（とき）ノ字ハ寺ノ下ニ日ヲ書ク 漏刻ノ象ナリ

皆の如く育ち
ざりけるこそ不思議なりけれ。さんけのあふぐ
三ノ四 杭
うつ。松よりなほ此のくみどうたに。松このつゝ
八 望月人のふもと禁中ふそいふ
おりなほ此人をいへ。ちづくよろこびをはこぶ。
禁秘抄奏時事上古随陰陽寮漏刻奏之近代指計
藏人仰之丑杭以後乃朝日ノ
左近陣、次第一刻ちまで。右近陣、丑の一刻より寅の
四ノ刻ばかりなり
のこる所日也
日のうちをはこぶる所はすこぶまぐつのあけく。秋の時あるべきなり
天子の出御なんかはしてつなどもあるべきなり。
ものごともはじめてこけとよりふぱ。そのこと同て
おなじ。

ちかいてもあり。
無勅之致平親王の男長江ま左中弁
俗のふみの中ありそ入道参郷之家堤乃中納言
はつもをはりうたうぱつこのうちおりげこころ
むすめ
へ秋のそらしほどいふなりなんとそおもひし。
もとの旅立ち勧修寺の家堤乃中納言ま捕らぱ。ほのち九捕仕みれ不審
晩ふいつそうひはまして。その月二日を行ひうんの比
ーすぐこそそのみはれおのくものがたしへのうへ
物忌を宣ふふうすべてこ
まをやうしまやのひしふ。ものみなのぐくすうるあそ
めるくまれへのあるぐと人のまよなるく。手などいどぐその
言種
もの姓名。まさへくやうなをぬよぐうる

家戸
なりてぞ入てぞ
使の
端正の
大臣大将の位階陞進これを武官の
大将の位ちをひろ

大将相當従三位。唐名羽林大将軍。延喜大将職員大臣一人
劣大臣

孔雀経の法壇

三世仏母大孔雀明王義浄三蔵譯三巻

五大号 是五忿怒之愛荼羅金剛衆ノ之圖也

秘蔵記云不動尊黒色極忿怒也居盤石上一面在大火炎中如
大劫火也 降三世 軍荼利 大威徳 金剛夜叉 中央不動
降伏
白馬の日
降伏

清少納言筆枕草子